

漢訳『方便心論』の金剛寺本と興聖寺本をめぐって

室屋安孝

漢訳『方便心論』の金剛寺本と興聖寺本をめぐって

室屋 安孝

序

『方便心論』とはインドの討論術の伝統をまとめた形で伝えている小品で、医学書『チャラカ・サンヒター』(Carakasamhita)第三卷第八章の著名な「論議道」(yadamarṣa)の記述とあわせ、初期のインド論理学の形成過程を理解する上で重要な資料とされてきた。^①

『方便心論』の原典はサンスクリット語であったと推定されているが、散逸しており、漢訳(大正蔵一六三三番)でしか現存していない。インド側の文献で『方便心論』が言及されている例はこれまで報告されておらず、梵文断片も確認されていない。漢訳本は四つの章(品)に分かれ、大正蔵本では「明造論品第一」、「明負処品第二」、「弁正論品第三」、「相応品第四」と題されている。大正蔵の本文は標点符号を除きおよそ七四六四文字で、およそ六頁の分量となっている。

漢訳本の原典研究は一九二五年の宇井伯寿氏(一八八二—一九六三)による本文校訂と書き下しが嚆矢であって(以下、宇井1925^②)、関連する論理学系の

資料との比較研究を通して詳細な解説がおこなわれている。ジュゼッペ・トゥッチ氏(Giuseppe Tucci, 一八九四—一九八四)は、宇井氏の研究を参照しながらインドのパンデイトの助言のもと一九二九年に漢訳本からの還元梵文を発表している(以下、Tucci 1981^③)。漢訳や日本語を使わない研究者にとってはトゥッチ本が底本となっている。また近年では二〇〇六年に石飛道子氏が本文全体を再校訂し、邦訳に新たな参考資料をもとにした解題を付している(以下、石飛2006^④)。石飛本では『中華大藏経』などの刊本は参照されておらず、本文批判という課題は残ったままとなった。本稿は、存在したであろうインド語原典を想定する作業の土台となるべき漢訳本がどのように成立し、どのように伝承されてきたのかという関心から、現存する日本古写経のうち、金剛寺本に伝承された本文の分析を目的とし、あわせて興聖寺本の本文の考察も行いたい。

『方便心論』の漢訳本の本文批判といっても、大正蔵の汎用性の高さは言うに及ばず、それ以外の対校資料が限られていたためか、宇井氏によって校訂されて以来本質的な進展をみなかった。『方便心論』には漢訳以外に和漢撰述の注釈書もなく、敦煌資料、房山石経などでの現存も知られていない。

また『高麗大藏經初刻本輯刊』（西南師範大学出版社、二〇一二）によっても『方便心論』の高麗版初雕本（一〇一一～一〇二九）の現存は報告されていない。本文批判を本質的に向上させる基礎資料に欠けているという印象を与えていたともいえる。現在までの本文批判はたとえば宇井氏が述べているように、「本文は縮刷藏經の上欄に於ける宋元明麗四本対校と鉄眼版とによつて意味の通ずる文字を採用した」（宇井 1982: 476）とする折衷主義（eclecticism）、近年の石飛氏（2006: 38）のように、校訂には大正藏の本文を底本とすると言明し、注で大正藏にあげられた異文をとりあげ吟味する（「異説があるときは、原則的に底本に従う。底本に従わない読みを採るときのみ根拠を示す」とする底本複写主義（copy text）をとるのが一般的であった。石飛氏は、大正藏に大きな影響を及ぼし、底本として採用されているともいわれる大日本校訂大藏經、いわゆる縮刷藏經と高麗大藏經も参照したと述べているが、現在入手が比較的容易となつており、本文批評で重要な位置を占める金藏広勝寺本（山西省趙城県）や、「平江府磧砂延聖院版大藏經」は参照していない。石飛氏の実際の校訂をみると、大正藏の本文で意味がとおるとして大正藏にしたがい、宇井氏や梶山氏などに支持された異文を退けている。大正藏の本文を却下し異文を採用しているケースは筆者が気づいた限り二例にとどまる（四三頁注一において宇井氏の校訂に従い「明本」を採用している。他方は以下、第七節を参照）。大正藏の誤植や高麗藏再雕本の本文の対校漏れ（それぞれ一例、T32/26c26-27の校勘注²⁷ T32/28a28）は、大正藏のまま注記していない（石飛 2006: 152, n. 2, 157）。

このような中、近年『方便心論』をめぐる本文批判に大きな展開があつた。国際仏教学大学院大学では二〇一〇年四月より天野山金剛寺所蔵の『方便心

論』写本を閲覧できるサービスが開始され、またPDFデータからのプリントアウトによる複写も入手可能となつている。さらに国際仏教学大学院大学長・教授の落合俊典先生のご厚情により、円通山興聖寺所蔵の古写經を閲覧する機会がえられた。筆者の知る限り、金剛寺本・興聖寺本をはじめとする日本古写經は『方便心論』の研究ではこれまで利用されていない。また大正藏の提示する『方便心論』の本文と、すでに利用可能となつて久しい趙城金藏版や磧砂版とがどのような関係にあるのか、という系統学的な議論もなされていない。以下の考察は、日本古写經のうち金剛寺本と興聖寺本のほか、大正藏本、その底本となつた高麗再雕本、金藏版、磧砂版の対校に基づいている。本稿では金剛寺本と諸本との関係に焦点をあてながら、漢訳本の本文伝承を評価するためにいくつかの事例を提示し、系統学的アプローチから考察することを試みていく。

一 系統学的アプローチ

系統学的アプローチが本文校訂に比較的大きな効果を及ぼすのは、対校本全体が一つの祖本に遡りうることを前提とし、祖本（archetype）の直下にある対校本グループ「低位祖本」（hyparchetype）に対する仮の訳語）が複数ある場合、それらからみて祖本がどのような位置に置かれているかを推定できる場合である。一般に大正藏では經典によつて資料状況がまったく異なり、房山石經や敦煌文書、奈良写經を利用できても祖本の位置が明確でなかったり、祖本が複数想定されたりして系統学的アプローチを適用できない場合もあるだろうが、『方便心論』の本文は伝承の揺れ具合の振幅度が低く、祖本

の位置も不明瞭ではなく、系統学的アプローチが一定の効果を発揮すると考えられる。すなわち漢訳本の本文は、(一) 日本古写経に伝承されている写本系、(二) 大正蔵に収載されている高麗再雕本をはじめとする刊本系の大きく二種類の系統に分岐することが確認できる⁶⁾。刊本系はさらに、(二A) 高麗再雕本と金蔵版から再建される北宋勅版の開宝蔵の本文、(二B) 磧砂蔵、大正蔵の校勘から知られる宋・元・明本、宮内庁本から再建される江南系(あるいは宋本系) 諸蔵の系統という二つに分岐できる。その場合、祖本の位置は写本系と刊本系の間いずれかの場所にあたるだろうが、その判断には検証が必要となる。

刊本系諸本に属さない日本古写経のような写本を用いる際の最大の利点は、いわゆる「外群比較法」が可能になるということである。「外群比較法」(outgroup comparison)とは進化生物学などにおける系統解析で一般的に用いられている方法で、進化の方向性(極性 polarity)を推定するために(決定ではない)用いられる。それによれば、ある分類単位(分類群 taxon) Xが、系統的に単一とみなしうるそれ以外の内群(ingroup)となる生物群に属さないという条件下で、内群の中のある形質(character) Aにおける形質状態(character state) aが分類単位Xにもみられる場合、その形質状態 aを原始形質 primitive (祖先形質的 plesiomorphic)と想定し、共有されていない形質状態 bなどを派生形質 derivative (子孫形質的 apomorphic)と推定することができる。写本系統学(stemmatology)の場合は、生物体系学でいう「分類単位」(taxon)が個々の写本・刊本に相当し、「形質」とは本文のある特定の箇所、「形質状態」とはその箇所における個々の異文に相当する。『方便心論』の場合でいえば、金剛寺本とある特定の刊本(群)の本文が一致す

れば、そのような共通本文は祖本に(相対的に)近い可能性が高いということがこの外群比較法によってえられる推定ということになる。

写本系資料がなく外群比較のできない状況下では、高麗蔵と金蔵版の一致によって開宝蔵系の本文を推定でき、開元寺版(いわゆる宮本あるいは旧宋本)と思溪蔵版系(宋・元・明の三本)が一致する場合に(大正蔵の校注では三例にのぼる)、外的典拠(external evidence)となる引用などの証拠資料(testimony/testimonia)が存在しないかぎり、批評家はいずれの系統を選択するかというジレンマの状況で二者択一を迫られる。そこで、日本古写経のうち写本系本文を維持していると判断されるもの(『方便心論』では金剛寺本)があつて、それを外群とみなしうる場合には、その本文と一致する刊本(群)の本文の方が祖本に近い可能性が高いと推定するのが外群比較法にもとづく判断ということになる。ただし、ここでいう祖本とは写本伝承のある段階での資料の状態をさし、現存資料から遡ることのできる状態に限定されている。『方便心論』の漢訳原本は散逸しているので、現存資料から再建される本文は原本そのものではなく、原本に近いが同様に散逸した仮説上の伝本の状態にとどまる。翻訳が完成した段階のオリジナルの正本の状態を再建するにはさらに文献学的な検証が必要となることは言うまでもない。

日本古写経以外に磧砂版を使用する利点は、低位祖本の推定に有力な根拠を与えることにある。『方便心論』の場合、大正蔵に記録されている校異は全部で五〇例あるが、福州開元寺版である「宮本」と思溪蔵系である「宋・元・明三本」の両方に共通の異文があるときに、それは江南諸蔵系本文とみなしうる。これら四本の刊本の原典を直接精査できない読者は、磧砂版を用いることによってそのような判断に傍証をあたえることができる。また「元

本」である普寧藏や「明本」である嘉興藏に固有の逸脱がある場合に、宮本と宋本、磧砂藏本が一致すれば、元あるいは明の本文は二次的に発生したものだともないうる。あるいは趙城金藏の校勘記に記された対校情報は思溪資福藏（宋本）から清本に至る諸本の異文を記録しているので、利用価値がきわめて高い。ただし、大正藏の宮本にあたる開元寺版は対校されていない。『方便心論』の場合は、金藏校勘記に記録される磧砂版の異文は筆者による磧砂版の対校と多く一致した。

金藏版を使用する利点は麗本の再評価にある。大正藏の本文である高麗再雕本の本文が江南諸藏系本文と異なるかあるいは一致している場合に、それが開宝藏系の本文として異なっているのか、あるいは一致しているのか、大正藏だけでは判断できない。というのも、高麗再雕本には開宝藏系の本文ではなく、江南諸藏系本文が取り入れられている事例（二六例）が見受けられるからである（以下、第四節（一）3b「混態が疑われる例」）。そこで金藏本と対校することによって、高麗再雕本と金藏本が一致する場合にはその共通本文が両者の共通祖先である開宝藏の本文であると確認することができる。また『方便心論』の場合は日本古写経の一つ興聖寺本が開宝藏系本文を示している（第四節（一）1a）、高麗再雕本と金藏本が一致しない場合であっても（同、1b・1d）、興聖寺本と一致する方を開宝藏系本文と判断することが可能となる。

仮に開宝藏系に属する第三の資料が利用できなかったとしても、金藏本が高麗再雕本と一致しない場合に、いずれかが金剛寺本と一致する場合、高麗再雕本のみ逸脱であって、それは開宝藏の本文ではなく、高麗再雕本の段階か初雕本の段階で生じた高麗藏に由来する独自異文、あるいは金藏の独自

異文と推定できる。また金剛寺本と金藏本が一致し、高麗再雕本が江南諸藏系本文と一致する場合には、高麗再雕本に混態の可能性があると推定することもできる。

以上のように、日本古写経、金藏版、磧砂版を用いることによって、上に述べた本文伝承の分析過程で頻繁にみられる「二者択一」のジレンマがある場合に、系統的な観点から一定レベルの客観的指針をたて、いずれか一方の系統を古形とみなしたり、低位祖本を再建したりする判断にある程度の蓋然性をもたせることができるようになる。

二 金剛寺本

大阪府河内長野市にある真言宗御室派の天野山金剛寺の所蔵する古写本一切経には、大正藏によって知られる刊本系本文とは異なる系統に属し、奈良写経のいわゆる写本系本文を伝承するものがあることが多くの事例で確認されている。金剛寺一切経は他の日本古写経と同様『貞元録』にもとづいた構成をもち、同経録に認定される五三五一巻一二〇六部のうちいまなお四千字百巻の経巻を伝える重要なコレクションである。書写年代の最も古いものは承暦三年（一〇七九）の『大般若波羅蜜多經』巻四百で、最盛期は嘉禎年間（一二三五～一二三七）を中心とする鎌倉時代であることである。⁹⁾

金剛寺本『方便心論』の場合は、その本文は刊本系に比べて異なった伝承とは言えないまでも、刊刻大藏経の個々の系統を特徴づける一定の逸脱パターン（結合的異文）を示していない。第六節で考察するように、とりわけ巻首の内題に続いて訳年・撰者・訳者名を挙げる箇所では、筆者が現在確認し

えたかぎり、金剛寺本は『出三蔵記集』などの経録によって支持されうる経年代を伝える唯一の資料であり、それに続く訳者等の記述は刊本や経録にはみられない情報を示している。

左記の金剛寺本の書誌情報は、落合俊典氏によって編纂された『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究 研究成果報告書《第二分冊》』（平成一五〜一八年度科学研究費補助金基盤研究報告書、二〇〇七年、二三八頁）による。七寺蔵『貞元新定釋教目錄』巻第二九・入蔵録上では七四六番にあたる。¹⁰

〔撰者・訳者名〕後魏延興年吉迦夜共曇曜等於洛陽譯¹¹

〔外題〕方便心論經一卷

〔内題〕方便心論 明造論品第一〔尾題〕方便心論經一卷

〔形態・装訂〕写本（卷子本）〔表紙〕あり

〔紐〕一部あり〔軸〕なし

〔紙質〕紙本墨書〔時代〕鎌倉中期

〔紙数〕一六〔行数〕二九

〔字数〕概して一七（一六、一八文字の場合もある）¹²

〔紙高〕二五・七 cm〔紙幅〕五一・八 cm

〔界高〕一九・八 cm〔界幅〕一・八 cm

〔天界〕三・七 cm〔地界〕三・二 cm

〔訓点〕なし〔印記〕なし

〔奥書〕一校了

表紙には「経／廿八／66」という整理番号のシールがふされている。本文は一六紙からなり、四四五行にわたって書写されている。本文部分は同筆で、

校正を担当した写経生は別筆とみられ、修正、加筆などが多く記入されている。全体にわたって蟲損、破損、シミなどが多く、文字の一部あるいは全体が喪失している場合も僅かならある。筆者は、落合俊典先生と日本古写経研究所のご厚情により二〇一三年五月一九日に金剛寺本を実見する貴重な機会を得たが、校合は主に、国際仏教学大学院大学の図書館で提供されたカラ印刷にもとづいている。

三 興聖寺本

京都市上京区の臨濟宗興聖寺派の本山円通山興聖寺にも『方便心論』写本が所蔵されている。同写本についての詳細な報告は別稿を期さなければならぬが、永万二年（一一六六）の識語から平安末の院政期に書写されたことが知られ、本来は、丹波国桑田郡小川郷（現在の亀岡市）にあったという西楽寺で勸進書写された一切経に属していたと推定される。¹³ 同写本は一卷の折本で、表紙の題簽には本文とは別筆で「方便心論一卷」と記されており、「興聖寺一切経／568／馨／8」という整理番号のラベルがふされている。内題は「方便心論」、尾題は「方便心論一卷」であり、紙本墨書、本文は一八紙、一紙あたり二九行（二七、二八行もある）、一行あたり一七字（二三字あるいは二二字の場合もある）、一筆である。奥書には「永万二年（才次丙戌）八月十三日求法沙門珎盛書 財田成澤分」とある。

興聖寺本の書写年代は金剛寺本より古いものの、その本文は金剛寺本と同類の写本系に属していない。むしろ開宝蔵系の刊本の特徴を示しており、楊婷婷氏の分類する「刊記も千字文も無い経巻」に属していることとなる。¹⁴ 藍

本の特定はできないが、高麗蔵再雕本や趙城金蔵本のいずれの誤りも継承していないことから、開宝蔵か高麗初雕本からの転写本であると推定される。

四 対校資料と略号

金剛寺本（略号は「剛」と興聖寺本（興））以外に本稿で使用する一次資料とその略号は以下となっている。

「大」＝『大正新脩大蔵経』（大正一切経刊行会）、第一六三二番、第三二卷（二三中―二八下、一九二五年一月一日発行）所収の本文。

「宮」＝「大」校異注より転載。底本は宮内庁書陵部所蔵の福州開元寺版。

「宋」＝「大」校異注より転載。底本は芝増上寺所蔵の思溪資福蔵本。

「元」＝「大」校異注より転載。底本は芝増上寺所蔵の普寧蔵本。

「明」＝「大」校異注より転載。底本は芝増上寺所蔵の嘉興蔵本。

「麗」＝高麗蔵再雕本、「盡」函。『高麗大蔵経』（東国大学訳経院、一九七五年）第六二七番、第一七卷（七四五上―七五三上、全二五張、「癸卯歳高麗國大藏都監奉勅彫造」の刊記あり）所収の本文。

「金」＝趙城金蔵広勝寺本、盡字号。『中華大蔵経（漢文部分）』（中華書局出版、一九八七年）第六七六番、第三〇卷（九六六中―九七四中、全二五張）所収の本文。校勘記は九七四下―九七六下で、「資（＝宋本、思溪版）」「普（＝元本、普寧寺版）」「徑（＝径山蔵、明本、万曆版）」「磧（＝磧砂版）」「南（＝洪武南蔵）」「清（＝乾隆版）」の情報を含む。

「磧」＝宋磧砂蔵本、「命七」。『影印宋磧砂蔵経』（影印宋版蔵経会、一九

三四―一九三六）、第二五六冊（四二右―四九右、音釈四九右―同左）に基づく。

（一）対校結果

筆者は、現在までのところ高麗蔵再雕本、金蔵本（校勘記を含む）、磧砂蔵本、金剛寺本との対校を終えている。大正蔵の校勘記は五一の見出し（*lemma*）をもっているが、それ以外に、金剛寺写本からの異文はおよそ一〇〇例、金蔵本から七十二例、磧砂版からは六十四例を記録している（これは最終的な数字ではない）。校異は異体字の情報を含んでおり、その一部には将来的に削除・無視してかまわないものもある。興聖寺本の対校の詳細な分析と報告は別の機会を俟たなければならない。異文の分類には大正蔵の本文を正文と仮定して、それから逸脱するものを異文とみなし暫定的な判断を提示している。補遺にあげた異文の一覧表は、本稿執筆時点での校異から一〇二の見出しを選び出し、各本の異文をまとめたものである。見出しの選択には資料間の系統関係を把握するのに適切だとみなしうるものを重視し、指示的異文（*indicative variants*）と判断しうるものから、結合的異文（*conjunctive variants*）あるいは共通異文（*common variants*）と分離的異文（*separative variants*）あるいは独自異文（*idiosyncratic variants*）¹⁵をあげている。金剛寺本にみられる明らかに偶発的過誤（*accidental errors*）とみなしうる誤写も多くは除外している。興聖寺本の偶発的過誤も原則として報告していない。なお、異文の分類は筆者の現時点での知見にもとづく異文の分散状態からみたり推測にすぎず、これ以外の分類の可能性を排除するものではない。最終的な判断は広範な資料分析や本文批評家の手に

ゆだねられており、そこに判断の多様性が期待されるのは当然であることを付言しておきたい。系統的な分析は決して排除的、普遍的な適用を標榜する方法論ではなく、本文批評家の描く一つのシナリオをあくまでも可能性として提供するアプローチに過ぎない。諸本の関係を図示する系統樹もそのような一つのシナリオを視覚化したものとみなしうる。前述のように、『方便心論』は系統樹の構成や、その背景となる系統字的アプローチが可能なテクストだと筆者は考えている。以上の前提によって、大正蔵の本文を基点とした異同の分析結果を要約すると次のリストのようになる(数字は大正蔵第三二巻の頁数)。

1 結合的異文

- a 興聖寺本、麗本、金蔵本：24b7, 24b14, 24b22 (剛), 25b4, 26a25, 26a25 (a), 26c3 (剛)
- b 興聖寺、金蔵本 (麗本を除く)：23b19, 23c2 (剛), 23c3 (剛), 24a24 (剛), 24c20, 25a9 (a) (剛), 25b7 (剛), 25b18 (剛¹⁷), 25b26, 26c12, 26c22 (剛), 26c23, 27b18, 27b18 (a), 27b19, 27c7, 27c28 (剛)¹⁶
- c 麗本、金蔵本 (興を除く)：24a14
- d 興聖寺本、麗本 (金を除く)：26a20-21, 28c9-10 (修正後の興)
- e 磧砂蔵本、宮本、宋・元・明の三本：23b4, 23b5, 23c4, 23c4, 23c18, 23c21-22, 24a23, 24a24, 24b28, 26a16, 26b16, 26b20, 26c13, 27a19 (剛), 27a28 (修正後の剛), 27b25, 27c5, 27c7, 27c15-16, 27c26, 27c29, 28a8, 28a27, 28b18 (剛), 28b24-25, 28c9-10 (剛¹⁷), 28c17
- f 磧砂蔵本、宮本、宋・元の二本 (明を除く)：23b5 (a), 26a29, 27a5, 27c8

2 分離的異文

- g 磧砂蔵本、宋・元・明の三本 (宮本を除く)：25b13 (興), 27a19-20, 28b12 (金)
 - h 磧砂蔵本、元・明の二本 (宮本、宋本を除く)：23b12
 - i 金剛寺本、宮本：25a23 (興の注), 25b6 (興), 26b5-6 (磧)
 - a 金剛寺本：24a13, 24a15, 24a16, 24a26, 24c1 (興), 24c12, 24c13, 25a4, 25a11-12 (興), 25b20, 26a5, 26c29, 27a28, 27b18 (a), 28a28-29, 28b1, 28b6, 28c17
 - b 興聖寺本：23c11, 25b13 (磧、三本), 28c9-10
 - c 麗本：23c15, 28a28-29, 28c9-10
 - d 金蔵本：23c11, 25a29, 25b28, 26a2, 26a15, 26b9, 28a24, 28b6, 28c14-15
 - e 磧砂蔵本：25a29, 28a8-9, 28a29, 28c12
 - f 宮本：23b23, 23b24, 25c10, 28b10
 - g 明本：23b13, 23b20, 25a16, 25a20
- 3 混態が疑われる例
- a 興聖寺本：24a14 (剛), 24c1 (剛), 25a11-12 (剛), 25c23 (剛¹⁷), 25b6 (剛¹⁷), 27b19 (「準」), 27c27-28 (剛)
 - b 麗本：23b19, 23c2, 24a24, 24c20, 25a9 (a), 25b7, 25b18 (三本¹⁷), 25b26, 26c12, 26c22, 26c23, 27b18, 27b18 (a), 27b19, 27c7 (剛), 27c28
 - c 金蔵：26a20-21, 28b12 (磧、宮、三本), 28c9-10
 - d 明本：23b5 (a), 26a29, 27a5, 27c8

4 大正蔵の校勘にない異文、異体字、あるいは誤記：23c3 (麗、磧、宮)、24c28 (磧、宮)、25b4 (興、麗、金の取、最)、26a5 (磧、宮)、26b5-6 (磧、宮)、27c26-27 (磧、宮、金蔵校勘記)、28a28-29 (麗の大と火)
 以下では右記のうち 23b5 (作者の言及の有無、「西域三蔵」の言及の有無)、『24a24 (「無漏差」)、『25a9 (a) (「鑽燧」)、『27a19 (「滌數」) を考察する。

五 金剛寺本の示す唐代写経の痕跡

唐・西明寺の慧琳(七三七〜八三〇)の『一切経音義』(大正蔵二二二八番、七八三〜八〇七年あるいは七八八〜八一〇年成立²⁾)には、音義で引用される対象語句の字形・文言が刊本系経典の本文と一致しない事例がみられる。慧琳音義は唐の都長安で認定されていた八〇〇年ごろの本文の状態を伝えるとみなされており、本文批判では重要な証拠資料 (testimonium) として扱われる。慧琳がとりあげた『方便心論』の音義 (T54/638b13 = 642b9 : 方便心論一卷) でもそのような逸脱がみられる。『一切経音義』巻五〇からの全七例 (T54/642b10-19) を次の一覧表にしめす。

表1 一切経音義における方便心論の音義

大正蔵の箇所 (23b28)	大正蔵での音義の相当箇所 穉稗	慧琳音義での見出し 穉稗	刊本・写本の本文 物諦(剛、興)、 惣諦(金)	別の本文 惣諦(麗)、 惣諦(磧)
(23c3)	總諦	惣諦	物諦(剛、興)、 惣諦(金)	惣諦(麗)、 惣諦(磧)

(24b22)	沙磔	沙磔		
(25a9)	鑽燧	鑽燧	攢(剛、興、金)	
(25b7)	見杙	見杙		
(26a18)	觸故	牟故		
(27a19)	滌數	滌數	滴(剛、磧、宮、 宋、元、明)	

慧琳音義と大正蔵の本文は基本的に一致しており、狭義の異文と呼べるものではなく、二箇所での相違(總と惣、觸と牟)は広義の異体字と理解すべきものである。また写本や刊本との重要な相違は、四番目にあげられる「鑽燧」で金剛寺本、興聖寺本、金蔵がしめす異体字であり、特に「鑽」の字についての慧琳による注記は考察に値する (T54/642b15-16)。

鑽燧(上祖官反。『顧野王』云、鑽猶鑄也、鑿也。『説文』穿也、(1)從金贊聲也。下隨悴反。『杜注左傳』云、取火具也、『説文』從火遂聲。(2)經從手作攢、非也。)

慧琳はここで『玉篇』の撰者顧野王や、『説文解字』、杜預による『春秋経伝集解』を使用して語義を精査する。そのうち「鑽」(正字体「鑽」)の字について、下線部(1)では大正蔵と同じ「鑽」を正字としているのに対して、下線部(2)では、自らが参照した經典の写本では「攢」となっており、正字ではない(「非也」と評している)。慧琳の閲覧した写本の「攢」の字が金剛寺本、興聖寺本、金蔵本にのみ見られる字体であることに注意すると、この字は唐

代の長安写経にまで遡りうる古形であることが強く示唆される。²³⁾ その場合、興聖寺本と金藏本の一致は開宝藏の本文を継承していると推定され、麗本や江南諸藏系の現行の本文の「鑽」は慧琳による訂正にも見られるように後に修正されたと推定することができるだろう。

第7番目の「滂敷」(海水の)滂の数)は『方便心論』第三章「正しい論理の弁別」(弁正論品第三)にみられる表現である。²⁴⁾ 慧琳による音義は「上互弟反。『考聲』云、水滴也、『通俗文』滂滂、亦零滴也、従水従帝」(T54、619b19)となっており、慧琳の参照した写本での文字の異同を注記していないので、開宝藏系本文と同様であったことが推定される。²⁵⁾ 「滂」は「滴」の俗字であるが、金剛寺本は江南諸藏系版本と同様に「滴」に作っており、外群比較法にもとづく系統的判断としては、後者の方が慧琳の時代より前の古形である可能性も示唆される。

六 金剛寺本の訳年・訳者等の情報

先に触れたように、金剛寺本でもっとも注目に値するのは、内題の下に記された訳者等に関する三つの情報である(その本文は第二節の書誌情報で引用した)。まず第一に金剛寺本は訳経年を「後魏延興年」として北魏の延興年間(四七二～四七六年)であったこと、第二に翻訳者として「吉迦夜共曇曜等」とし、吉迦夜と曇曜の二人以外に複数の翻訳者のいたこと、第三に「於洛陽譯」とし、翻訳は洛陽でなされたことを伝えている。あらためて金剛寺本・興聖寺本と刊刻版大藏経との異同を五つの部分に分けてしめすと次の表のようになる。

表2 卷首情報の比較

型	写本および刊本	作者	翻訳年	翻訳者	翻訳地
A	剛		後魏延興年	吉迦夜共曇曜等	於洛陽
B	大、興、麗、金		後魏	西域三藏吉迦夜	
C	宮、宋、元、磧	龍樹菩薩造	後魏建興年	吉迦夜與曇曜	
C'	明	龍樹菩薩造	後魏	吉迦夜與曇曜	

この表で類型として示したように、『方便心論』の訳者等の記述は細かくは四種に分類できるだろうが、実質的には金剛寺本のタイプ「A型」、興聖寺本、麗本及び金藏本に共通の開宝藏にさかのぼるタイプ「B型」、そして宮本をはじめとする江南諸藏系諸本のタイプ「C型」の三種であるといつてよいだろう。明本は麗本などによって「建興年」を削除したことが推定され、混態をしめしている。

全体の異同を金剛寺本の視点からまとめると次のことが言える。金剛寺本に作者の指定はなく、開宝藏系のB型と一致し、龍樹造とするC型に反する。金剛寺本は翻訳年代を「延興年」とし、経録に傍証される元号を正確にあげる唯一の資料である。形式としてはC型に一致する。ただし、翻訳年は経録とは異なり、延興年間の不特定の期間であって、『出三藏記集』のような第二年(四七二)でないことは注意されてよい。翻訳者について金剛寺本はC型に一致する。開宝藏系版本が吉迦夜のみをあげることは特殊であり古形とみなすことは難しいだろう。ただ金剛寺本のように吉迦夜と曇曜以外に複数認める記述は他のタイプにはない。金剛寺本での翻訳地は「洛陽」であった、これも他のタイプにはない新規情報となる。

(一) 「外群」としての金剛寺本の系統

先行研究では、明本を除く江南諸蔵系の刊刻大蔵経で卷首にあげられていた「建興年」（複数の候補があるが、多くは四〇〇年以前）という年代は、梁・僧祐（四四五～五一八）撰の『出三蔵記集』（大正蔵二二四五番）卷二の記述に基づいて間違いとされてきた。それによれば、北魏（後魏、元魏）の延興二年（四七二）に西域僧の吉迦夜が曇曜と共に翻訳し、それを劉孝標（四六二～五二二）が筆受したという²⁷。翻訳者は、開宝蔵系版本が曇曜の名を排除していたり、江南諸蔵系では両者による訳出とされたりしたが、『出三蔵記集』などの記述によって後者が正しいと看做されている。一方、金剛寺本はどちらの場合も経録などで知られる記述を保持しており、系統的観点からみると、金剛寺本が刊本の二大系統のいずれにも属さないこと、そして刊本系全体を低位祖本 (hyparchetype) とする一群 (内群) の外側に位置すること、すなわち「外群」に属することを明確に示している。

撰者の僧祐は、翻訳地の「北国」について特定していない。注目すべきは三部の経典がまだ「京都」、すなわち南朝梁の首都建康（現在の江蘇省南京）にもたらされていない、同地の寺院の書庫（経蔵²⁸）に入蔵されていないとして欠本扱いにしていることであり、このことは『出三蔵記集』の情報の信頼性を必ずしも問題なしとはしないことになる。

金剛寺本に記載される二名以外の複数の翻訳者を支持する記述（「等」と翻訳地（洛陽））についての情報を充分に正当化する経録側の資料はこれまでのところ見つからない。延興年間といえ、北魏の第七代孝文帝（四

六七年生まれ、在位は四七一～四九九）が幼少の頃で、当時の都城は平城（現在の山西省大同市）にあった。洛陽への遷都は太和十八年（四九四）である。金剛寺本の伝承にしたがうならば、『方便心論』は遷都される以前の洛陽で翻訳されたことになるが、真偽は明らかでない。塚本善隆氏によると、曇曜といえ、北魏の仏教復興期に多面的に活躍した人物で、高宗の和平元年（四六〇）に第二代沙門統となり、遅くとも太和元年（四七七）か太和三年（四七九）までは活躍していたと推定される²⁹。興味深いことに、『魏書』の『釈老志』によれば曇曜は十四部の経典を新たに訳出したことになっている³⁰。

曇曜又與天竺沙門常那邪舍等、譯出新經十四部。

又有沙門道進・僧超・法存等、並有名於時、演唱諸異。

『釈老志』はここで、曇曜が一四部の経典を訳出したのは天竺沙門「常那邪舍」とそれ以外（「等」）のものたちとであったことを記録しており、金剛寺本の記述を想起させる。塚本氏はこの「常那邪舍」が誰であったのか未詳であるとしており、塚本氏の翻訳を英訳しているレオン・ハーヴィッツ氏 (Leon Hurvitz) も同様に未詳としているが、後者はその名前を「[Jānayasas (*dʒiːanɡaːyasa)] と還元している³¹。塚本氏が述べるように「常那邪舍」と吉迦夜を結びつける資料は知られていない。曇曜が複数のインド系訳経僧と仕事をしたかどうかとも確認できない。

(二) 作品の成立と著者問題

金剛寺本は『方便心論』の著者を特定していなかったが、『方便心論』研究で最も紛糾しているテーマの一つに著者問題がある。これは宇井(1982: 46)に「此論は宋版大藏經以来龍樹の著書となし、麗藏に至つて著者不明とせられて居るが、予は既に宋版の説の全く誤で信ずるに足らないことを明にし得たと信ずるから、此論はつまり龍樹以前に小乗仏教を奉ずる或者の手になつたものであると考へる」と述べられたことに端を発する。この繰り返しの援用される有名な一文に表明された『方便心論』著者の小乗仏教徒説、あるいは龍樹説を否定する立場は、クリスチャン・リントナー氏(Christian Lindner)、沈劍英氏など一定の支持者を集めている³²⁾。その一方で、梶山雄一氏は『方便心論』第四章(相応品)などに龍樹の作品にみられる帰謬論証(Prasanga)を同定し、「反論理学書」という性格づけを与え、龍樹説を実証的に提唱した³³⁾。龍樹説に続いているのは、市村承秉氏、鄭偉宏氏、石飛道子氏(ただし校訂本文としては認めていない)などである³⁴⁾。著者を小乗教徒か大乘教徒かに峻別することに懐疑的であり、梶山氏の解釈に批判的に龍樹説を否定するのはスン・ヨン・カン氏(Sung Yong Kang)である³⁵⁾。木村俊彦氏は『成実論』の訶梨跋摩(Harivarman)系あるいは経量部系の著者であるとす³⁶⁾。近年の欧米の研究で注目されるのは、ブレンダン・ギロン氏(Brendan Gilion)とヴァンサン・エルチンガー氏(Vincent Elschinger)の分析である。ギロン氏は龍樹説を否定する先行研究を紹介し『方便心論』編集説に言及するが、中立的な立場を維持して作者不詳としている³⁷⁾。エルチンガー氏は、龍樹に帰せられる偽作(『広破論』Vaidalyaprakaraṇa)や提婆(Aryadeva)に帰せられる偽作群(『百論』『百字論』など)と同様に、遅くとも紀元後四世紀頃までに成立したであろうという見解を表明している³⁸⁾。また同氏は、『方便心

論』に特定の部派・学派に帰属することを示唆するものはないと述べている³⁹⁾。『方便心論』の著者問題は多極化の傾向を強めているのが現状といえよう。上に述べた作者をめぐる議論は作品に述べられている論証学をどのように評価するのかというテキスト解釈と評価の問題、また『チャラカ・サンヒタ』などの初期の論証学の記述との関係をどのように分析するのかという歴史の評価に関わっている。しかし、そもそも龍樹作かどうかという高等批評にかかわる議論の喚起される背景には、宇井氏の指摘のあと等閑にふされている側面、すなわち漢訳『方便心論』の基礎研究にかかわる別の側面がある。北宋勅版として蜀地益州で開版された開宝蔵の系統の刊本では作者は特定されていないのに対して、江南諸蔵系統の刊本では龍樹に帰せられている。実際の著者問題の議論で龍樹作を支持する研究者は、後者の江南諸蔵系の伝承(上記第六節表2のタイプC)が正しいと判断していることになる⁴⁰⁾。これは系統学的アプローチからいえば、伝承が二極化している場合にはどちらがオリジナルなのかを決定する要素がほかになれば、相互に等しいウェイトが置かれるというジレンマに陥っていることをしめしている。ではそのジレンマはどのようにすれば解決できるのか。

近年の原典研究における著者問題にはさらに新たな展開がみられる。上に触れたギロン氏は、漢訳本が複数の作品を編集(compilation)して成立したのではないかという見解を述べている。複数の作品を編集したものと理解することで、作品の中にある多くの変則性(anomaly)が説明可能になるとい⁴¹⁾。もしギロン氏のいうように『方便心論』が複数の作品を編集したものであるとすれば、作品内部に複数の著者による複数の作品を想定して別々の部分を判別していく作業が必要になるだろう。またそこで想定される

作品内部の個別の作品・部分がすべてインドで成立したのか、あるいは中国成立の作品・部分も含まれているのかといった疑問も同時に考慮されるべきであろう。その場合、船山徹氏によって提唱されている漢訳仏典の三分類（漢訳經典、編輯經典、偽作經典）という視点にもとづく判定が求められることになる。ギロン氏の見解に基づけば、『方便心論』は羅什訳の『大智度論』や『成実論』のような中国編輯經典のうち「ジャンル(7)その他（中国で編輯した教理学書）」に関係するということになるだろうが、残念ながらギロン氏はそれを判定する資料となる変則性の具体的事例を挙げていない。

漢訳本『方便心論』の原型は現存のものとは異なっていたのではないかという指摘は、『国訳一切経』所収の訓読・注記をおこなった飯田順雄氏の指摘とも関連させて考察する必要がある（以下、飯田1940⁴³）。飯田氏は、『方便心論』のインド語の原典にあった註釈が漢文本文に誤って挿入されてしまったか、翻訳者の加えた注記が伝承の過程で本文に混入してしまったかもしれないという可能性を指摘している。

(三) 金剛寺本の情報の引用

本邦撰述の文献のうち珍海（一〇九一〜一一五二）の『三論名教抄』（大正蔵二二〇六番）に金剛寺本の情報と同一の記述がみられる（T70/830a25-26：「因明論者、如龍樹菩薩所造『方便心論』。此論一卷、復魏吉迦夜共曇曜等於洛陽譯」〔対応箇所は下線部、ただし「復」は「後」の誤記〕。したがって、遅くとも平安時代後期には金剛寺本の記述が存在していたことが確認される。珍海とは平安時代末期に東大寺などで活躍した三論宗の学僧で、『因明大疏四種相違

抄』（大正蔵二二八〇番）などの因明研究の著作でも知られている⁴⁴。珍海は『三論名教抄』巻一五の第六科「五明処義」すなわち五つの学問分野の解説で、「因明論」の作品として『方便心論』をあげており、それに続いて同書の三箇所から本文を引用している（T70/830a26-b22 = 『方便心論』T32/23c5-16、24c9-13、24c15-19）。

しかしながら、珍海は二度にわたって『方便心論』が龍樹作であることを書き添えており、それは金剛寺本の記述になく、興味深い。というのも、珍海は別の作品『三論玄疏文義要』（大正蔵二二九九番）巻二で「中論」の意味（中論義）について考察しており、そこでも『十住論』や『莊嚴仏道論』に続けて『方便心論』を龍樹の作品としてあげている（T70/220a11-20）。『莊嚴仏道論』とは鳩摩羅什訳『龍樹菩薩伝』（大正蔵二〇四七番）で龍樹の著作としてあげられる作品であり（T50/184c17-21）、珍海が『莊嚴仏道論』に続いてあげる『方便心論』は、羅什訳『龍樹菩薩伝』では『大慈方便論』の位置に置かれていることが分かる。一般に『莊嚴仏道論』と『大慈方便論』とは『龍樹菩薩伝』において『中論』などと並び称される作品としてあげられるが、現在知られるどの作品に相当するのかわかられていない⁴⁵。吉迦夜・曇曜訳『付法蔵因縁伝』巻九の龍樹伝にも『大慈方便』としてみえる⁴⁶。以上のことから、珍海が『方便心論』を龍樹作とみなすとき、その典拠として『龍樹菩薩伝』などによって知られる『大慈方便論』に同定していることが確認される。

珍海の記述との関連で注記したいのは、唐代華嚴宗の第三祖として名高い賢首大師法蔵（六四三〜七二二）の記述である。法蔵には龍樹に帰せられる『十二門論』への注釈書『十二門論宗致義記』（大正蔵一八二六番）があり、

そこで法蔵は『方便心論』を龍樹作であるとしている。これは筆者が現在知りえる限り、『方便心論』を龍樹作であるとしたおそらく初期の事例である。法蔵は、「(論証式による) 標示と考量による論破」(標量破)の方法・規則を述べる経典(儀軌)に『方便心論』と『廻諍論』(大正蔵一六三二番)を龍樹作としてあげ、世親作としては『如実論』(大正蔵一六三三番)をあげている。⁴⁷『如実論』は、『方便心論』と同様本文伝承に問題があり、刊刻大蔵經の二つの系統で作者の記載が二分していることでも知られている。開宝蔵の系統は作者不詳とし、江南諸蔵の系統は作者を世親(天親菩薩)としている。現在では『如実論』は世親よりも前に書かれた著作であったことが定説となっており、⁴⁸学界の知見は開宝蔵の系統を(暗黙に)支持しているが、『如実論』を世親作だとするのは既に文軌の『因明入正理論疏』巻一にみられ、またおそらくそれに依拠して善珠も同じように言及している。⁴⁹唐代の仏教界の見解が『如実論』の本文伝承に影響を与えた可能性が疑われる。一方、大正蔵に収載される和漢撰述の作品の中で『方便心論』を龍樹作としているのは上にあげた珍海と法蔵のみである。法蔵自身がどのような判断や情報に基づいているのか明らかではないが、法蔵による同定が『方便心論』の本文伝承に何らかの影響を与えた可能性も否定できない。

七 金剛寺本、興聖寺本、趙城金藏本が示す古形

第五節において、金剛寺本と興聖寺本、金藏本が八〇〇年頃の慧琳の参照した写本と同じ異文を有していた事例を一例紹介した。筆者のこれまでの校合では、金剛寺本と興聖寺本、金藏本だけが共通の異文をもつケースが他に

六例確認できている(特定の異体字の共有も含む、第四節(一)1bを参照)。そこに、『方便心論』の本文伝承を考察する上で興味深い事例が一例あった。この事例は、『方便心論』第一章でジャイナ教の九つの根本原理・範疇(*tatva padārtha*)を列挙する箇所にあらわれる。大平鈴子氏によれば、九つの範疇をあげるのは初期のジャイナ教の作品にも知られており、古い起源をもっているらしく、著名な綱要書『タットヴァ・アルタ・アディガマ・ストラ』(*Tattvārthahīnasūtra*)ではそれが七つの範疇に縮小されたところである。⁵⁰『方便心論』は前者のグループに属している。以下にとりあげる問題の焦点は、大正蔵に保持される「漏」と「差」という字の帰属とその正誤にある。まずジャイナ教の九つの範疇をあげる『方便心論』の本文と既存の訳を提示する。

『方便心論』(T32:2423-24)：有命無命罪福漏無漏差戒具足縛解

宇井(1982:492)：有命と無命と罪と福と漏と無漏と戒具足と縛と解と

Tucci(1981: Uṇṇādayan 7, 23-24): jīvo jīvaḥ papāṇa puṇyama āśravaha-

nirjāra sanvāraḥ bandhaḥ mokṣaḥ |

飯田(1940:89)：命と無命と罪と福と、漏と無漏と、戒具足と縛と解と

石飛(2006:69)：有命、無命、罪、福、漏、無漏、「差」戒具足、縛、

解

さらに大正蔵以外の校異を、「漏」と「差」の前後とともに表にして示すと以下のようになる(略号は第三節を参照)。

表3 「漏」と「差」の比較

校本	問題となる本文(下線部)	原語との対応
大、麗	無漏差戒具足	無漏 = 「滅 nirjara」(?)
宮、宋、元、明、磧	無漏戒具足	戒具足 = 「遮 samvara」
剛、興、金	無差戒具足(剛は是に作る)	無差 = 「滅 nirjara」(?)

「差」の問題の所在から述べる。ジャイナ教の範疇のうち第七の項目「戒具足」(samvara) について、宇井氏は「縮に差戒とあり。三本鉄に差なし」として「差」という字を「戒具足」との関連で扱い、校訂本文で削除している。宇井氏の引用する「鉄」とは、黄檗宗の僧鉄眼道光(一六三〇～一六八二)によって開版され天和元年(一六八一)に完成した大蔵経で、万曆版、いわゆる「径山蔵」の復刻版といわれているものである。この鉄眼版(筆者未見)は江南諸蔵系統の本文であったらしい。

飯田氏(1940: 94)も宇井氏の解説を踏まえ、「縮蔵等には「戒具足」の所が「差戒具足」となつてゐる。宋・元・明、旧宋本等には「差」なし」と注記し、「差」の字を削除している。石飛氏(2006: 70)は「文脈からとって読む」とした上で「差」戒具足」と提示するが、句読点から明らかなように「差」の字をやはり「戒具足」に関連づけている。

大正蔵に知られる現行本には、「差」にかかわる校勘学上の問題だけでなく、第六の範疇「無漏」という翻訳語の問題も指摘できる。ジャイナ教で一般に「滅 nirjara」に相当する術語が『方便心論』では「無漏」と訳されていることが注意される。これについて宇井氏(1982: 495)は解説で「無漏(nirjara)」と疑問符をふして、「無漏の訳語が精密でない」と評している。

トゥッチ氏(1981)は「nirjara, samvaraḥ」(Uḥāraḥdayam, 7, 23)に当たる箇所を「The Ch [inese: YM]. has anāśrava 無漏 but it corresponds, perhaps, to nirjara (so also U1)」(Tucci 1981, notes on UH, 16)と、宇井氏にしたがって「無漏」の原語の推定と訳語の問題を指摘している。確かに「無漏」は anāśrava というサンスクリット語を想定させるが、問題の焦点はその「無漏」が nirjara の訳語なのか、またその場合それは適当かどうかということに帰着するだろう。

nirjara の一般的な意味は、形容詞ならば「老いない、若い、新鮮」という意味であり、ジャイナ教での術語は「業を徐々に打ち砕くこと」などと説明される。ジャイナ教の nirjara は宗教的・倫理実践の文脈で用いられる重要な概念で、谷川泰教氏は「滅」と現代語訳し、輪廻の過程で古くより靈魂に付着している業物質を排除し浄化することであると説明する⁵¹。

『方便心論』の異文で注目されるのは、麗本が「無漏差」と読む箇所、金剛寺本と興聖寺本、金蔵本は「無差」と読んでいることである。「無差」から一定の意味合いを読み取ることは容易ではなく、「滅 nirjara」にも「無漏 anāśrava」にも関連づけられない。一見すると、上記三本は結合的異文を共有しているとみなされるであろう。麗本は「差」を含んでいるとはいえず、「漏」の字も含んでおり、前に見たように「無漏差」か「差戒具足」と区切ることになり、いずれの場合も「差」の問題は解消されない。校訂の過程で無意味で奇異なものを排除するのは容易だが、麗本と金蔵本から推定される開宝蔵の本文はどのようなものであったのか、という疑問も残る。第一節で述べた「系統的アプローチ」という視点からは興聖寺本と金蔵本が一致する限り、麗本が逸脱していても、前者を開宝蔵の本文であると予測すること

になる。また「外群比較法」という視点からも、外群と目される金剛寺本と共通する興聖寺本、金藏本の本文である「無差」が開宝藏の本文であり、祖本に遡りうる本文であろうと推定することができる。

また、「無差」では意味をなさないと認め、「差」の字が本文の誤った伝承に基づいていると仮定すると、金剛寺本と興聖寺本、金藏本、そしておそらく開宝藏はどのような本文を「誤って」伝承してしまったのか、という考察も必要となる。派生的本文であると推定される江南諸藏系の「無漏」についても、それが誤写によって「無差」から変化したと想定するには「漏」と「差」の音や形態の違いが相対的に大きいので、伝承の過程で江南諸藏系に意図的な変更があったと判断するのが自然だろう（外群比較法を適用しなければ、「無漏」から「無差」への変更もありうる）。実際に、「SAT」大正新脩大藏経テキストデータベース2015版⁵²（以下SAT2015）を用いて両者の異文関係を探索しても該当事例はみられないので、写経生の機械的な誤写であった可能性は小さい。「無差」が別の本文からの誤伝承だとした場合の説明として注目されるのが、麗本を含めた金剛寺本などの四本は実際には「差」の字ではなくその異体字（金藏本は老）を使っていることである。ジャイナ教の術語の意味からは離れてしまうが、nijāraの原義「老いない」からすると、「差」は本来は「老」であって、nijāraは「無老」と直訳されていたのではないだろうか。すなわち「差」の異体字と「老」という二つの字が外見上類似しているために、「老」は金剛寺本や金藏本などに見られるような「差」として伝承されるようになった可能性がある。漢訳の正文が「無老」であったとしてもジャイナ教の原義や仏教語の特定の用法とはまったく無関係であり「誤訳」といふべきだろうが、「無差」という本文が写経生の機械的な誤

写によって生成された過程の説明は可能となる。SAT2015によると「差」と「老」でみられる異文関係は単純検索で少なくとも九例みられるので、例外的な誤写ではない⁵³。「無老」という読みは現存する写本・刊本では傍証されないもので、もしこれを祖本よりも遡りうるさらにオリジナルに近い本文であると想定する場合は、祖本に修正（conjecture）を加えることになる。

「無老」から、あるいは「無差」から「無漏」の読みが発生した経緯は明らかでないが、いずれでも意味をなさないもので、江南諸藏の系統では直前の「漏」から類推して、仏教教義で一般的な「無漏」という術語に置き換えたという状況が推定される。

では麗本に何が起こったのか。大正藏すなわち高麗藏再雕本で採用されている「無漏差」はいわゆる混態（contamination）の可能性が高い。開宝藏の段階では「差」であったものが、再雕本の編纂段階で江南諸藏系で知られる「漏」を、すでに存在する「差」の異文とする注記が漏入した、あるいは書き加えたのではないかと推定される。

結 語

本稿は、金剛寺本と興聖寺本という日本古写経に属する資料の考察を中心に『方便心論』の本文伝承の問題を考察してきた。特に、祖本が写経を通じて伝承される過程を、生物の進化の歴史を再構成するために利用される系統分類学の概念と方法によって解釈する場合に、金剛寺本が写本伝承の方向性（極性）を推定する鍵となる「外群」になりうることを提示しようとした。原則として、ある資料が外群に属することを想定するには、異文の分布状態

の確認と、少なくとも一例によってその資料だけが有する正文の証明(『方便心論』では「延興年」が必要であり、その場合「内群」の構造も明らかでなければならぬ)。外群であることの確認ができれば、金剛寺本(外群)と刊刻大蔵経系の諸本(内群)を比較することによって、金剛寺本と一致する本文が古形であろうと推定するのが外群比較法である。それは、異文の判定における先験的な出発点となる。外的典拠がない限り古形かどうかを客観的に証明できないのが通常であり、言うまでもなく、実際に古形であるかどうかは個々のケースによって厳密に検証しなければならない(本文の共有が偶発的であって遺伝的でない場合もある、いわゆる Homoplasy 非相同)。本文批判では、文献学的手法続きによって、外群比較法による初期推定とは異なった判定を下すことも前提とされている。本稿で扱った事例はわずかに数例にすぎないが、『方便心論』が洛陽で翻訳されたという金剛寺本の情報以外では、興聖寺本や刊刻大蔵経が金剛寺本と一致する本文に一定の蓋然性を与えることが可能であった。他の個々の事例に同様の考察を加えるという批判校訂は今後の課題となる。

東京大学史料編纂所がオンラインで公開する「奈良時代古文書フルテキストデータベース」によると、『大日本古文書(編年文書)』には総計で『方便心論』のエントリーが一六件ある。そのうち最初の記録は「天平八年九月二十九日」、すなわち七三六年の日付で「方便心論一卷(送)」とあり、当時『方便心論』が写経のために送付されたことを知ることができる。その藍本は七三五年に玄昉が将来した一切経であったかもしれない。次の記録は「天平勝宝三年九月二十日」、すなわち七五一年の日付の經典中に「方便心論一写『十九』」の言及で、「以上四卷八貫」として他の二つの經典「発菩提心論

二写『卅二』」「無相思塵論一写『四』」とともにあげられている。これは「寫書布施勘定帳(正倉院文書)」に記された項目で、八世紀中ごろ『方便心論』の書写がおこなわれていたことを再び確認させてくれる。金剛寺本『方便心論』はこのような奈良写経の系譜に位置づけられるであろうというのが筆者の現在の見通しである。『方便心論』の日本古写経としては他に七寺本など複数の経巻が現存しており、今後調査の可能となることが期待される。

本稿の一部は二〇一三年五月一八日の国際仏教学大学院大学附置日本古写経研究所の公開研究会での発表に基づいている。研究発表と天野山金剛寺での写本調査の機会をお与え下さった落合俊典先生に深謝し、同公開研究会においてご教示を賜った赤尾栄慶先生、林寺正俊先生ほか諸先生方に感謝申し上げる。船山徹先生より関連資料のご提供とご教示をいただき、山中行雄先生には関連資料のご送付と草稿へのご批判をいただいたことを記して、厚くお礼を申し上げます。なお、本稿はオーストリア学術研究助成基金 FWF P27863-G24 (Fragments of Indian Philosophy) による研究成果の一部である。紙幅の都合で注記は最小限にとどめていることを予めお断りしたい。大正蔵からの本文引用には原則としてTの略号をとともなう巻数のあとに斜線、頁数、行数をつづける。

註

(1) 「論議道」の概念については、工藤成樹「論事に見られる論議道」(『印度学仏教学研究』一六・二、一九六八、八六〇―八六四) 八六〇頁を参照。 *vaḍḍānārga* という表現は「正しい手段をもつ人 *sadupāya*」という語とともにクマールラの *Ślokavārtika, nīralambana, 128cd-129ab* にも見られる(寺石悦章「シムローカ・ヴァールテイカ」ニラーランバナヴァータ章の研究(5)―和訳と解説―『仏教文化』二二、二〇〇二、一一五―一三五、特に一一七頁)。ゲルハルト・オ

- ーバー・ン・トパー氏 (Gerhard Oberhammer) は「論議の伝統」(Yāda-Traditionen) とこの概念を提唱し、初期の論理学を歴史的に描写しようとする (Sung Yong Kang, "Die Carakasamhita in der Geschichte der indischen Philosophie I. Nyāya und Carakasamhita." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 50 (2006): 143-176, esp. 145, n. 12)。
- (2) 宇井伯寿『印度哲学研究』第二(岩波書店、第二刷一九八二「岩波版初版一九六五」、初版は甲子社書房、一九二五)。
- (3) Giuseppe Tucci, *Pre-Diṅṅga Buddhist Texts on Logic from Chinese Sources*, 2nd edition, Madras 1981 (originally Baroda 1929).
- (4) 石飛道子『龍樹造「方便心論」の研究』山喜房佛書林、二〇〇六。
- (5) 国際仏教学大学院大学の上杉智英先生にご教示いただいた。
- (6) 漢訳大藏経の成立史については竺沙雅章「第一章 漢訳大藏経の歴史―写経から刊行へ―」(『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇、二七―二九二)、船山徹「漢語仏典―その初期の成立状況をめぐって―」(『漢籍はおもしろい』研文出版、二〇〇八、七一―一八)などを参照。
- (7) 外群比較法についてはダイアナ・リップスコム (Diana Lipscomb, *Basics of Cladistic Analysis*, Washington D. C. 1998) 六頁、三中信宏『系統樹思考の世界―すべてはツリーととも』(講談社現代新書、二〇一〇) 一七二―一七四頁などを参照。
- (8) 落合俊典「日本の古写経と中国仏教文献―天野山金剛寺蔵平安後期写「録外―5」の成立と流伝を巡って―」(『京都大学人文科学研究所開所七十五周年記念中国宗教文献研究国際シンポジウム』二〇〇四、一七―二八) 二〇頁を参照。
- (9) 金剛寺一切経については、落合俊典「金剛寺蔵長寛三年写『観無量寿経』について」(『印度学仏教学研究』五〇・二、二〇〇二、五五九―五六三) 五六〇頁、上杉智英「金剛寺蔵一切経本『集諸経礼懺儀』巻下 解題・影印」(『集諸経礼懺儀 巻下』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇) などを参照。
- (10) 宮林昭彦・落合俊典編「貞元新定釋教目錄卷第二十九・卷第三十」(牧田諦亮監・落合俊典編『中国・日本經典章疏目錄 七寺古逸經典研究叢書 第六卷』大東出版社、一九九八、五九―一七) 九〇頁。「方便心論」(『吉迦夜共曇曜或二卷 凡四品 二譯初闕』)。
- (11) 前掲書では「後魏延興年吉迦夜共曇曜菩薩於洛陽譯」となっており、「等」の位置に「菩薩」があるが、写本上では「等」であることを落合先生と赤尾栄慶先生にご確認いただく機会を得た。
- (12) 前掲書では「一七」。
- (13) 興聖寺古写経と西楽寺一切経については例えば落合俊典「興聖寺本『馬鳴菩薩伝』について」(『印度学仏教学研究』四一・一、一九九二、二九三―二九九) 二九四―二九五頁を参照。
- (14) 楊婷婷「日本古写経本『出三藏記集』の系統について―興聖寺本を中心に―」(『印度学仏教学研究』六二・一、二〇一三、五〇―四九九) を参照。
- (15) 異文の分類のための用語はパウル・マース (Paul Maas) の著名な『本文批判』(*Textual Criticism*, translated by Barbara Flower, Oxford 1958) 四二―四三頁が古典的典拠になっているが(三中前掲書一八六頁も参照)、「指示的過誤」という場合の「過誤」(error) という表現は、筆者の判断で「異文」(variant) という比較的中立的な表現に改めた。これはマースによる「過誤」という分類が、本文批評によって再建された批判本文 (critical text) という仮説的な構築物を基準にしているからである。マースのいう「過誤」は一般的な誤写だけでなく、二次的・派生的本文も含んでおり、例えばある批評家は結合的過誤と判断しても、別の批評家はそれを正文と判断することは本文批評では十分に起こりうるし、後代の写本伝承が派生的本文の方を正文として理解してそのような本文を作り出した(復元した)ときに、それは「過誤」を導入したのではなく、意図的な改変(改善)であったはずである。
- (16) 『方便心論』の祖本の本文としては「時因」であったと推定され(麗本は混態の可能性が高い)、『これは28a27で麗本自身によって認められている。

(17) ヴァイシエーシカ学派の第六の範疇である内属 (samavaya) を金剛寺本と開宝藏系諸本が「不作諦」に作ることで、外群比較法から推定される祖本の本文は「不作諦」となる。「作」を「きる、けづる」の意に解すれば、「分離しては成ししない avatasiddha 関係」という内属の定義が予想される。しかし、すでに梁代の慧遠(五二二～五九二)述『大般涅槃經義記』(大正蔵一七六四番、T37/784a7-9) におおむね samavaya が「無障諦」と訳されることから、江南諸蔵系の「不障諦」が正文となる可能性が高い。この箇所については辛嶋静志先生よりご批判を賜った。ここに記して謝意を表する。

(18) 大正蔵の「説諭」に対して、永明延寿の『宗鏡録』(大正蔵二〇一六番、九六一年成書) 卷三四 (T48/613c29) に引用される『方便心論』からの同文には、江南諸蔵系本文と同様の「就諭」がみられる。永明延寿は一〇世紀頃永明寺(現在の浙江省杭州市淨慈寺)で活躍したことが知られているので、江南地方で流布していた本文を利用したとみることができるだろう。

(19) 大正蔵の「耶」に対して、『宗鏡録』の引用 (T48/614a3) では江南諸蔵系と同じ「也」となっている。なおこの相違は金蔵の校勘記には報告されていない。

(20) 大正蔵本の「然」に対し、嘉祥大師吉藏撰『百論疏』(大正蔵一八二七番、T42/247b10-12) に引用される『方便心論』は金剛寺本と同様の「燃」を伝える。

(21) 大正蔵本の「性障」、金剛寺本の「如障」に対し、『百論疏』(T42/244b21) と基辨(一七二二～一七九二)撰『大乘法苑義林章師子吼鈔』(大正蔵二三三三番、T71/521b1) は『方便心論』からの引用として「五姓障」としている。唐・天台宗の荆溪湛然述『止観輔行傳弘決』(大正蔵一九二二番、T46/435b2) と北宋代天台宗の錢塘沙門釋、孤山智圓述『涅槃經疏三德指歸』(卅新纂續藏經六六二番) 卷一一 (X37/502b12) は「五性障」とする。金剛寺本は『百論疏』などのように本来は「姓」の字を継承していたとみられる。

(22) 前者は「一切経音義序」に、後者は『宋高僧伝』卷六に基づく。二種の成書年代については落合前掲論文 (1992: 298, n. 3) を参照。

(23) 『方便心論』での鑽燧から火が生じる比喩について、石飛 (2006: 98) は佛

陀耶舎・竺佛念譯『長阿含經』(大正蔵一番) 卷一〇の用例「如兩木相攢則有火生」(1/61c14) を原始仏典からの用例として引用しているが、大正蔵の本文は「鑽」の字ではなく「攢」であり、校異には三本の「措」、聖語蔵の「攢」が挙げられている。類似的表現としては「譬如兩木相磨和合生火」(求那跋陀羅譯『雜阿含經』大正蔵九九番、T2/82a20-21) などがあげられる。

(24) 石飛 (2006: 139) は「滂」、字井 (1982: 555) と飯田 (1940: 103, 105, n. 135-136) は「滴」の字を採用している。

(25) 慧琳音義は、梁・慧皎撰の『高僧伝』(大正蔵二〇五九番) 卷五にみえる「一滴」(T50/356b12) を「一滴」として引用し、伝本にみえる「滂」の字は「滴」の俗字であると説明する。「下丁歴反、顧野王」云、商謂滴瀝也、『説文』滴、猶水欒注也、従水滴聲、高音同上、傳文從帝作滂、俗字也」(T54/877a11)。定源『慧琳音義』所拠『高僧伝』版本略考一以『高僧伝』卷五音義為例」(徐時儀他編『佛經音義研究』第二屆佛經音義研究、國際學術研討會論文集) 鳳凰出版社、二〇一〇、二五四～二六七) 二五九～二六〇頁を参照。

(26) 曇曜の年代をスチュワート・ヤング (Stuart H. Young, *Conceiving the Indian Buddhist Patriarchs in China*, Dissertation, Princeton University, 2008) 一一二頁とそれを参照する山野千恵子『龍樹菩薩伝』の成立問題」(『仙石山仏教学論集』五、二〇一〇、八六～八五) 八六頁は四一〇～四八五頃とする。ただしヤング (2008: 112, n. 27) の参照する二次文献は曇曜の年代を特定していないので根拠は明確ではないが、塚本善隆氏の仮説に基づいていると推測される。塚本善隆『第三 沙門統曇曜とその時代』(『北魏仏教史研究』塚本善隆著作集第二卷、大東出版社、一九七四) 八五頁は、「北魏が涼州を征服した年(四三九)」に曇曜が「三十歳で」あって、「少なくとも彼は恐らく七十歳以上の高齡まで沙門統として活動し得た」と述べている。山野氏には、ヤング (2008) の当該箇所を「送付いただき、参照文献をご教示いただいたことを記して、感謝する。」

(27) T55/136b-12: 「雜寶藏經十三卷」(闕) 付法藏因緣經六卷(闕) 方便心論二卷(闕) 右三部、凡二十一卷、宋明帝時、西域三藏吉迦夜、於北國以僞延興二年、

- 共僧正釋曇曜譯出、劉孝標筆受。此三經並未至京都」。また欧米の研究では、吉迦夜等による翻訳を第二訳とし、仏駄跋陀羅 (Buddhabhadra) によるものを散逸した初訳として言及するものがある (例えば Tucci 1981: Introduction, xi)。この情報は、隋・費長房撰の『歷代三宝紀』(大正蔵二〇三四番) 卷七・訳経東晋の「方便心論一卷(共法業出、見高僧傳)」(T49/71a25) にもとづくが、梁・慧皎による『高僧伝』などの仏駄跋陀羅の列伝中の『修行方便論』(『達磨多羅禪經』大正蔵六一八番) の訳業との混同によるものではないかと推定される。該当箇所は、慧皎著、吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝(一)』(岩波書店、二〇〇九) 二一〇頁。
- (28) 上定林寺については前掲書、吉川・船山訳『高僧伝(一)』三二七頁注一五、経蔵については同『高僧伝(四)』(岩波書店、二〇一〇) 一四七頁注一〇を参照。
- (29) 塚本善隆前掲書八三―八五頁を参照。
- (30) 塚本善隆『魏書釈老志の研究』(塚本善隆著作集第一巻、大東出版社、一九七四) 二〇七頁(漢文) および二一〇頁(和訳) を参照。
- (31) Leon Hurvitz, Wei Shou: Treatise on Buddhism and Taoism, an English Translation of the Original Chinese Text of Wei-shu CXIV and the Japanese Annotation of Tsukamoto Zenryū (in: *Yin-kang, the Buddhist Cave-Temples of the Fifth Century A. D. in North China*, Volume XVI, Supplement, Kyoto 1956, 25-103), 73, 880 を参照。
- (32) Christian Lindtner, *Nāgārjuna. Studies in the writings and philosophy of Nāgārjuna* (Copenhagen 1982), 17, n. 44 は、龍樹が二諦論的な世俗の立場から著作した可能性を否定していない。沈劍英『《方便心論》は反邏輯的著作―佛經知識論的形成―讀後』『普門學報―二〇〇三年讀後感』二〇〇四、三九―四六(未見)。
- (33) 例えば、梶山雄一「『大乗知識論の形成』(平川彰・梶山雄一・高崎直道編『講座・大乗仏教 9―認識論と論理学』春秋社、一九八四、一一―二〇) 一一―四二頁。
- (34) 例えば、Shohei Ichimura 市村承秉、"The Period of Nāgārjuna and the *Fang-pien-hsin-lun* (『方便心論』 or *Uphayavyākāśāstra*).", *Journal of Indian and Buddhist Studies* 43, 2 (1995), 1033-1028. 鄭偉宏『漢傳佛教因明研究』(中華書局、一九九九) 二八―四三、特に二九頁。石飛道子『方便心論』の作者について『印度哲学仏教学』一九、二〇〇四、九〇―一〇五(石飛 2006: 9-14 を参照)。
- (35) 例えば、Sung Yong Kang, *Pañcānyānu: Die fünfgliedrige Argumentationsform in den frühen Debatte-traditionen Indiens mit besonderer Berücksichtigung der Carakasaṃhitā Vi. 8, 30-36*, Göttingen 2007, 209-214 (Kang 前掲論文、2006: 164-165 を参照)。
- (36) 木村俊彦『方便心論』の論理と立場』『印度学仏教学研究』五四・二、二〇〇八、五五三―五六三。
- (37) 例えば、Brendan S. Gillon, "An Early Buddhist Text on Logic: Fang Bian Xin Lun," *Journal of Indian Philosophy* 22 (2008): 15-25 一一頁。
- (38) 例えば、Vincent Elschinger, *Buddhist Epistemology as Apologetics*, Wien 2014, 175, n. 251: "there are some reasons to believe that the VPr, the (pseudo)-Aryadeva corpus and the "UH are works composed, no later than the end of the fourth century CE, in an intellectual environment where a Vasu (bandhu) was active."
- (39) エルチンガー前掲書一九六頁注一九。
- (40) 例えば、山本和彦氏(鎌田茂雄他編『大蔵経全解説大事典』雄山閣、一九九八、四五八頁)は『方便心論』の解説で、「龍樹の諸著作との類似性や漢訳に「龍樹菩薩造」と記されていることから龍樹作を否定するだけの決定的な根拠はなく、彼本人か、彼と同時代の論理学者の知識に秀でた大乘仏教徒の著作になると考えられる」と述べている。
- (41) ギロン前掲論文 (Gillon 2008: 21): "Prof. Masaaki Hattori, who is preparing a translation of the text into Japanese, has suggested that the text might be the

result of a compilation various texts. This conjecture, if true, would explain many of the anomalies *Fang Bian Xin Lun* presents.”

- (42) 例えば、船山徹『仏典はどう漢訳されたのか—ストロラが經典になるとき』(岩波書店、二〇一三) 一六九—一七二頁。
- (43) 飯田順雄「方便心論」(『国訳一切経 論集部一』大東出版社、再版一九四〇「初版一九三三」) 八一頁。
- (44) 『因明大疏四種相違抄』については坂上雅翁「珍海撰『因明大疏四種相違抄』について」(『印度学仏教学研究』三三・二、一九八五、六三—六二六、珍海の因明研究書のリストは六二四頁)を参照。
- (45) 湛然は『止観輔行傳弘決』巻一・一で『大悲ママ方便論』について「一大悲方便論、明天文・地理・作薬・作薬、饒益世間」(T46/146b20-21)と述べている。同文は法雲編『翻譯名義集』(大正蔵二二二番)巻一・宗釋論主篇第一〇(T54/1065c23-24)・南宋の天台僧志磐撰の『佛祖統紀』(大正蔵二〇三五番・T49/174c21の細注)にも出でる。
- (46) T50/318b15-18:「廣開分別摩訶衍義、造『優波提舍』十有萬偈、『莊嚴佛道』、『大慈方便』如是等論。各五千偈。令摩訶衍光宣於世」。後代の文献の言及もこの名称によっている。道世撰『法苑珠林』(大正蔵二二二番、T53/682c10-11)・安澄撰『中論疏記』(大正蔵二二五番、T65/29b12:『莊嚴佛通論』五千偈、「大慈方便論」五千偈)、善珠述『唯識義燈增明記』(大正蔵二二六一番、T65/332b27-28)など。
- (47) T42/214b13-15:「四標量破、謂如龍樹所造『方便心論』及『迴諍論』、世親所造『如實論』等、並各略標世間因明三支五分比量道理、校量破計」。山口益「迴諍論について」(『密教文化』七、一九四九、一一—一九)二頁も参照。なお武邑尚邦氏は法蔵の「標量破」(「量を立てて評破を行う」)について、『迴諍論』はむしろ「隨執破」に属すべきだと述べている(『仏教論理学の研究—知識の確実性の論究—』百華苑、第二刷一九八八「初版一九六八」、一〇六頁)。
- (48) 桂紹隆「インド論理学における遍充概念の生成と発展—チャラカ・サンヒタ

—からダルマキールティまで—」(『広島大学文学部紀要』四五、特別号一、一九八六、一一—一二) 四八—四九頁を参照。

- (49) 文軌『因明入正理論疏』(正統蔵八四八番) X53/68c12 (＝沈劍英『敦煌因明文献研究』「上海古籍出版社、二〇〇八」三二八頁二—二二行)：「故世親所造『如實論』云、因有三、謂「是根本法、同類所攝、異類相離」。『如實論』中の対応箇所は道理難品第二「T32/30c20-21(我立因三種相、是根本法、同類所攝、異類相離)」、31a1-12も参照。善珠は文軌を援用しているらしく同文を記す。善珠(七二三—七九七)撰『因明論疏明燈鈔』(大正蔵二二七〇番) T68/260a26-28:「故眞諦譯世親所造『如實論』云、因有三相、謂根本法、同類所攝、異類相離也」。さらに基辨は善珠の『秋篠鈔』を引用している。『因明大疏融貫鈔』(大正蔵二二七二番) T69/128c20-22 (但し「眞諦譯」は割注扱い)。武邑前掲書(1988) 四六頁も参照。
- (50) Suzuki Ohira, *A Study of Tatvārthasūtra with Bhāṣya, with Special Reference to Authorship and Date*, Ahmedabad 1982, 52.
- (51) 谷川泰教「原始ジャイナ教」(長尾雅人他編『インド思想—』岩波講座・東洋思想第五巻、岩波書店、一九八八、六二—八六) 八四頁。
- (52) <http://21dzkl.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php>.
- (53) もう一つの可能性として「老」ではなく「老」を想定することも不可能ではない。SAT 2015では「老」と「差」の異文関係が二例みられる。
- (54) <http://www.apih.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html>.

補遺

校異一覽 (一部のみ)*1

大正蔵(T)	大正蔵本文	金剛寺本 (剛)	興聖寺本 (興)	高麗再雕版 (麗)	趙城金藏 (金)	磧砂藏 (磧)	宮本 (宮)	宋本 (宋)	元本 (元)	明本 (明)
23b4	一卷	×				×	×	×	×	×
23b5	×	×	×	×	×	龍樹菩薩造	龍樹菩薩造	龍樹菩薩造	龍樹菩薩造	龍樹菩薩造
23b5 (a)	西域三藏	延興年				建興年	建興年	建興年	建興年	
23b12	常樂					常幾			常幾	常幾
23b13	又造論者									又造者者
23b19	惱壞		壞者		壞者					
23b20	正論。又欲									論又正欲
23b23	長靜論者						長靜論者			
23b24	問曰						曰			
23c2	外道有論法	外道論有法	外道論有法	!	外道論有法					
23c3	總諦	惣諦	惣諦	惣諦	惣諦	惣諦	(惣諦)			
23c4	不作諦					不障諦	不障諦	不障諦	不障諦	不障諦
23c11	若先說界		若先語界		若說界					
23c15	衣非是時	衣非是味	衣非是味	!	衣非是味	衣非是味	衣非是味	衣非是味	衣非是味	衣非是味
23c18	若說喻者					若就喻者	若就喻者	若就喻者	若就喻者	若就喻者
23c21-22	而說喻耶					而說喻也	而說喻也	而說喻也	而說喻也	而說喻也
24a13	初異後同	初同後異								
24a14	苦習滅道	苦集滅道	苦集滅道			苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道
24a15	四沙門果	四沙門								
24a16	然衆香木	燃衆香木								
24a23	瑜伽外道					瑜伽外道	瑜伽外道	瑜伽外道	瑜伽外道	瑜伽外道
24a24	無漏差	無差	無差	!	無差	無漏	無漏	無漏	無漏	無漏
24a26	性障	如障								
24b7	苦習滅道	苦集滅道		!		苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道	苦集滅道
24b14	無希求		無希求	無希求	無希求					
24b22	珍寶	珍寶	珍寶	珍寶	珍寶					
24b28	豈獨常乎					豈獨常乎	豈獨常乎	豈獨常乎	豈獨常乎	豈獨常乎
24c1	共身受耶	苦身受耶	苦身受耶							
24c12	又一切法	又一切滅								
24c13	是故無常	是無常								
24c20	應當問言		應當問言	!	應當問言					
24c22	須求	湏求	湏求	湏求	湏求					
24c28	遍大					徧大	(徧大)			
25a4	何語能令	何謂能令								
25a9	即便信受					即便言受	!	即便言受	即便言受	即便言受
25a9 (a)	鑽燧	攢燧	攢燧	!	攢燧					
25a11-12	若宣諸義	若宣說諸義	若宣說諸義							
25a16	二辭無異									二辭無義
25a20	皆名爲失									皆名爲夫
25a23	足手殊勝	足最殊勝	足手<最>殊勝				足最殊勝			
25a29	見火有烟		!		見火有因	見火有煙				
25b4	寂實		寂實	寂實	寂實					
25b6	相不明了	根不明了	根不明了		!		根不明了			
25b7	以指按目	以指案目	以指案目	!	以指案目					
25b13	是今所見		是令所見			是令所見	!	是令所見	是令所見	是令所見
25b18	若見真實	若是真實	若是真實		若是真實	!	若是真實			
25b20	善知方藥	善方藥								
25b26	答曰		答	!	答					
25b28	略則唯八				略則惟八					
25c10	以那婆毛						那婆毛			
26a2	如有樹杙		!		如樹杙					
26a5	韋陀經典	婁陀經典				園陀經典	園陀經典			
26a15	我雖異身		!		我雖異					
26a16	是名同類					是名類同	是名類同	是名類同	是名類同	是名類同
26a20-21	龜毛鹽香		龜毛監香	龜毛監香	龜毛鹽(?)香					
26a25	屠獍等		屠獍等	屠獍等	屠獍等					
26a25 (a)	刹利種		刹利種	刹利種	刹利種					
26a29	明負處品					方便心論明負處品	方便心論明負處品	方便心論明負處品	方便心論明負處品	方便心論明負處品
26b5-6	更相違返	更相違反				更相違反	更相違反			

大正藏(T)	大正藏本文	金剛寺本(剛)	興聖寺本(興)	高麗再雕版(麗)	趙城金藏(金)	磧砂藏(磧)	宮本(宮)	宋本(宋)	元本(元)	明本(明)
26b9	若不如是名		!		若不如是名					
26b16	而爲根覺					而爲相覺	而爲相覺	而爲相覺	而爲相覺	而爲相覺
26b20	而可難耶					而可難也	而可難也	而可難也	而可難也	而可難也
26c3	大棘刺	大棘刺	大棘刺	大棘刺	大棘刺					
26c12	所因起	所因起	所因趣	所因起	所因趣					
26c13	輕疾聽者					經疾聽者	經疾聽者	經疾聽者	經疾聽者	經疾聽者
26c22	燈生時即用	燈生即用	燈生即用	!	燈生即用					
26c23	應當是常		應當是常	!	應當是常					
26c29	答曰	立曰								
27a5	辯正論品					方便心論辯正論品	方便心論辯正論品	方便心論辯正論品	方便心論辯正論品	
27a19	幾滴、滴數	幾滴、滴數				幾滴、滴數	幾滴、滴數	幾滴、滴數	幾滴、滴數	幾滴、滴數
27a19-20	涅槃亦然					涅槃亦無	!	涅槃亦無	涅槃亦無	涅槃亦無
27a28	是何減因	何是減目(?)				何是減因	何是減因	何是減因	何是減因	何是減因
27b18	當知有過		當知有過	!	當知有過					
27b18(a)	非但唯獨	非俱唯獨	非但唯獨	!	非但唯獨					
27b19	皆有斯過		皆有斯過故	!	有斯過故					
27b25	即自爲盜					即自是盜	即自是盜	即自是盜	即自是盜	即自是盜
27c5	而第五者					而第五人者	而第五人者	而第五人者	而第五人者	而第五人者
27c7	如是等名	!	如是次第名	!	如是次第名	如是次第	如是次第	如是次第	如是次第	如是次第
27c8	相應品					方便心論相應品	方便心論相應品	方便心論相應品	方便心論相應品	
27c15-16	云何名同					云何故同	云何故同	云何故同	云何故同	云何故同
27c26	二曰損減					二損減	二損減	二損減	二損減	二損減
27c26-27	五答多問少					五問少答多	五問少答名(五問少答多)*2	五問少答名	五問少答名	五問少答名
27c27-28	九不遍同	九日不遍同	九日不遍同	!	!					
27c28	十日時同	十日時因	十日時因	!	十日時因					
27c28-29	十三相違	十三違	十三違	!	十三違					
27c29	十四不違					十四不相違	十四不相違	十四不相違	十四不相違	十四不相違
28a8	同於虛空					同虛空	同虛空	同虛空	同虛空	同虛空
28a8-9	是名增多					是名僧多				
28a24	復次汝立				復次汝					
28a27	是名時因					是名時同	是名時同	是名時同	是名時同	是名時同
28a28-29	如火不到	如大不到	!	如大不到						
28a29	則不能割					則到能割				
28b1	是名不到	長名不到								
28b6	虛空與我	虛空覺我			空與我					
28b10	當說因緣						常說因緣			
28b12	我云何常				我云何是常	我云何是常	!	我云何是常	我云何是常	我云何是常
28b18	婆羅樹子	婆羅樹子				婆羅樹子	婆羅樹子	婆羅樹子	婆羅樹子	婆羅樹子
28b24-25	答曰自有					答曰有	答曰有	答曰有	答曰有	答曰有
28c9-10	諸說法要	諸論法要	能說法要		諸論法要	諸論法要	諸論法要	諸論法要	諸論法要	諸論法要
28c12	若種惡田					若種惡日				
28c14-15	是故諸有				是諸有					
28c17	方便心論一卷	方便心論經一卷				方便心論	方便心論	方便心論	方便心論	方便心論

*1 空欄は大正藏の本文と同文であることを示す。記号「!」はママの意で強調を表す。記号「×」は大正藏等に不在であることを表す。「宮本」中の丸括弧は宮内庁本原典で確認した情報で、大正藏に記載されていないものの補記を示す。記号「<>」は欄外等で追加された本文を表す。

*2 金藏校勘記：資磧普南徑清作「問少答多」。

On the Kongōji and Kōshōji manuscripts of the *Fangbian xin lun*

Yasutaka Muroya

The *Fangbian xin lun* 方便心論 (Taishō No. 1632), also known as **Upāyahṛdaya/Prayogasāra*, is a Buddhist manual of debate from an early phase in the history of Indian dialectics and logic, the phase prior to the solidification of distinct Buddhist traditions of reasoning. The original text in an Indic language like Sanskrit has been lost to us and is only indirectly available through the (most probably first) Chinese translation by Jijiaye 吉迦夜 and Tanyao 曇曜 of the Northern Wei Dynasty. The present paper focuses on text-critical problems of the Chinese translation that remain in spite of a critical edition by Hakuju Ui 宇井伯寿 (Tokyo 1925) and a recent detailed study by Michiko Ishitobi 石飛道子 (Tokyo 2006), and aims to discuss the genealogy of the text and its transmission by way of a stemmatic approach. In this paper, one hundred and two cases are selected from the collation of five primary sources in addition to the Taishō edition and four further texts recorded therein. A survey of their genealogical affiliation is made. The present author argues that the *Fangbian xin lun* is a text to which the so-called stemmatic analysis can be applied effectively if it is undertaken on the basis of genealogically more independent sources than the witnesses known from the Taishō edition (keyword: outgroup comparison). Such sources are found in old Japanese Buddhist manuscript collections. For the present contribution, two manuscript materials are taken into account. One of them, which is kept in the Kōshōji 興聖寺 (Kyoto) collection and was copied in 1166, appears to be genealogically related to the Kaibao zan 開寶藏 or the First Carving of the Goryeo edition 高麗初雕本. The other is the 13th-century manuscript in the collection of Kongōji 金剛寺 (Kawachinagano, Osaka), which is regarded as an “outgroup” manuscript, namely, a source/group of sources that is genealogically not subordinate to any other source/group. In order to examine the position of the archetype and prove its relationship to the Kongōji manuscript, four cases are discussed in detail on the basis of independent testimonies such as Huilin’s 慧琳 *Yiqiejing yinyi* 一切經音義 (Taishō No. 2128) and the relevant catalogues of the Chinese Buddhist Canon. This examination makes it plausible that the Kongōji manuscript represents a textual transmission belonging to a manuscript tradition retained since the Nara period.